

編集後記

本年、34巻1号より新たに編集協力者にいただいた。私は、臓器移植やクローン技術といった先端医療技術の倫理的・法的・社会的問題について、調査研究をしてきた者である。この、生命倫理といわれる領域は、昨今役所の告示する指針を通じて、ルーチン業務として生命科学・医学の研究開発の中に定着した、という評価もできなくはないのかもしれない。だが、みな忙しそうに取り組んでいながら、一番大事なことは誰もやっていないという、日本でありがちなことがここでも起こっている気がしてならない。

とくに思うのは、指針の遵守といった日常業務から離れて、生命科学・医学と社会の間に起こる過去、現在、未来の問題を、常時調査研究する機関がないことである。生命倫理に関する公的研究助成は少なくないし、大学にも生命倫理を冠したプログラムやセンターができてはいるが、年限付きのアドホックなものがほとんどのようだ。国の情報や予算に頼らない民間独自の組織となると、さらに見当たらない。この分野専門の唯一の民間シンクタンクだった科学技術文明研究所が今年3月末に解散、閉鎖されたのは、その意味で非常な損失である(私は同研究所の職員だったので相反利益を有することを申告しておくが、それでもこのように言うことを認めていただけるものと思う)。

民間、とくに営利企業は、生命倫理を研究し提言を行う場としてふさわしくないだろうか。科学技術文明研究所が登記上株式会社だったことに、違和感があると言った国会議員がいた。だが、役所や大学も、研究開発の当事者としては民間企業と同じ立場のはずである。国の研究所や国立大学にも相反利益が満ちていることは言うまでもない。だからこそ、それを超える志が求められる。その点は、官も民も同じだ。

科学研究から得られる益は、目先の利潤や商品開発だけではない。これが知りたいという一心に動かされて研究した、その第一級の成果を、科学者でない者でも享受できるのが、人間の最高の喜びであり贅沢である。そこで従われるべき倫理は、科学的に必要で妥当なことしかしてはいけない、ということにほぼ尽きる。

ただ医学は、ほかの科学と異なり、患者を相手に結果を出さなければならない責任を負う。しかしそうであっても、医学の評価基準は、曖昧な「有用性」ではなく、科学的に根拠のある安全性と有効性でなければいけない。本号は、その安全性～有害事象の特集である。本誌は、研究開発に関する偏りのないデータを集め公表する、自主独立の場として始まったと聞く。私も、独自に生命科学・医学と社会の間に起こる問題を調査研究するという志を、貫いていきたい。

(棚島次郎)